

平成21年度 第2回豊田市生涯学習審議会 会議録

【日時】 平成21年9月28日(月) 午後2時～午後4時10分

【場所】 豊田市役所 南庁舎4階 団体会議室

【欠席者】 伊藤 教彦(豊田市青少年健全育成推進協議会会長)

【次第】 1 あいさつ

2 議事

- ・生涯学習の成果が地域で循環するしくみについて
- ・平成22年度交流館運営基本方針(案)について

3 報告

- ・第40回東海北陸社会教育研究大会三重大会の参加者について

【議事】(1)生涯学習の成果が地域で循環するしくみについて

「生涯学習の成果が地域で循環する」しくみの現況として、交流館講座の事例発表(若林交流館「団塊の世代講座 男の生活達人塾」:交流館講座の受講者が活動の幅を広げ、地域のまちづくり活動に関わるまでの交流館職員のかかわり、受講生に対する支援など)及び、生涯学習フェスティバル(交流館自主グループの活動成果発表の場)について、事務局及び鈴木委員が説明を行った後、委員により、生涯学習の成果が循環するしくみづくりに向けて、課題の洗い出しのための意見交換が行われた。

生涯学習フェスティバルについては、今年度の生涯学習審議会の評価対象事業とするため、社会教育委員による現地調査を依頼。委員の調査報告、各生涯学習フェスティバルの実績等の資料は、第3回審議会で同会議による評価資料として提示予定。

【意見】

- ・1講座の受講生から、交流館の他の講座との交流や、自主的に交流館の公開講座(味噌づくり講座など)に発展して活動をしている。作戦会議と称し、自分たちで事業の計画(作戦)をたてていくのが、子ども時代を思い出して楽しい。
- ・現在、交流館で自分たちのグループが自主的に企画した事業を行っているが、あるとき、主事がきっかけを作ってくれたことが発端で、別のグループと意気投合し、互いに協力できる関係を作ることができた。ボランティアと主事は立場が違うが、自分たちを理解しようという熱意がとてもよく伝わってきて、一緒にやれるのがうれしかった。
- ・中学生と交流館は互いを高めあう関係。中学生は小学生に比べ、交流館への出入りが少ないと思うが、交流館祭に中学生がイベント出展することを通じて、交流館の存在を知るきっかけとなっている。
- ・交流館事業の中で、グループの育成の中で、特に難しいのは、自主グループの自立。自立した自主グループと主事との信頼関係を築くのは容易ではない。交流館主事は新しい職員が増えて、グループとあうんの呼吸をとれない主事が増えてきた。主事も交流館の中にとどまるのではなく、外に出て行くことが求められると思う。
- ・交流館ふれあいまつりが、生涯学習フェスティバルになって、対象とするのも生涯学習から地域自治まで守備範囲が広がってきたが、コミュニケーションがとれる職員は少なく、今後の対応が難しいと思われる。

- ・ ふれあいまつりの実行委員会は、コミュニティ会議と自主グループの合意形成が必要だが、ワークショップの場をもつこと自体が大変である。
- ・ 主事のスキルが違うので、核になる人材がいる交流館は団体間のコーディネート、合意形成を担うファシリテーションを交流館が行うことができるが、そういう職員がいないところでは、試行錯誤が今後も続く。
- ・ ふれあいまつりの主導権をコミュニティ会議と自主グループがとりあうということが発生しかねない。
- ・ 猿投台交流館では、中学生を対象に交流館ホームページボランティア養成講座・サイエンスボランティア養成講座を行っている。中学生ボランティアたちはイベント時に活躍するだけでなく、各自治区のお祭りにも広報用の腕章をつけてホームページ用の取材に行くので、地域が中学生の活動に関心を持ち、地域で子どもたちを見守るという関係に広がりをもたせることができた。こうした事業にも主事が日ごろから中学生に対して声かけを行ったり、中学生間の日程調整を担ったり、という業務に努力をした成果であると思っている。
- ・ 主事が仕事として担う部分は多く、人に動いてもらうのにも段取りがいる。また段取りもうまくいかないことが多い。主事には力量と手腕の両方が求められる。
- ・ 同世代・異世代へつなぐということが大事。
- ・ 若林交流館事例では、40～60歳代がバランスよく参加しており、楽しそうな活動をしているのがよい。
- ・ 循環はいろいろな意味を持つキーワード。学習の生活化、生活の学習化を循環することで、豊かになっていくという絵姿。
- ・ 地域生活の中では、その人が主体になれることが重要。自分の居場所と思えることが大事になってくる。
- ・ 高橋交流館で3年間子どものキャンプ活動を続けているが、1年目は大学生が企画をしていたものが、2年目からは中学生たちが主体となって活動できるようになってきた。
- ・ 男性の場合、地域が自分の居場所と思う人は少ないから、交流館講座を通じて地域とつながりを持つということはよいことだと思う。

【議 事】(2)平成22年度交流館運営基本方針(案)について

平成22年度の交流館事業の運営基本方針(案)についての審議。会議の意見をふまえて作成した修正案を審議会吉田会長・鈴木副会長に確認の上、決定することとした。

【意見】

- ・ 豊田市の目標を達成するため、交流館の位置づけがあるということを明示するため、総合計画の目標、教育行政計画の目標についても、基本方針の文章に明らかにしたほうがよい。
- ・ 交流館事業のうち、主催・共催・後援は、どれが優れているかという手法ではなく、どの事業も必要な手段である。一方向的に示すのは、誤解を招くので、修正が必要である。
- ・ 共催・後援の事業内容に、人材育成とあるが、団体の自立のための支援もあると思う。
- ・ 「2.交流館の役割」身近な学習拠点の部分で、「変化し続ける社会のニーズ」とあるが、「社会のニーズ」という言葉からは、別の存在がニーズを決めるというイメージが連想される。学習拠点で求められるのは、市民のニーズの意味も必要で、言葉を修正したほうがよい。

- ・ 「３．平成２２年度 交流館の取組方針について」の について、公民館評価が社会教育法に入ったことを踏まえ、評価のことをもう少し触れたほうがよい
- ・ 「４．平成２２年度交流館事業のキーワード」の中で、「高齢者のいきがづくり」とあるが、高齢者といわれると言われた対象は気分が悪いので、言葉が工夫できないか。高齢者が何歳以上か定義はいろいろあるが、年齢で区切るというのは、生涯学習にはそぐわないのではないか。生涯学習は年齢別で行う学校教育とは違う。

キーワードは交流館職員はじめ、事業に携わる者に示すものなので、受講者には高齢者という名前はストレートに伝えているわけではない。
- ・ 「地域を知る」とあるが、知るだけでは、受動的である。考えるとしてはどうか。